

ナチス・ドイツの報道操作

—— 1938年4月10日「国民投票」をめぐる ——

嶋田直子

I はじめに

人種主義的で帝国主義的なイデオロギーを根底に据えたナチス・ドイツ (NSDAP = Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei、国民社会主義ドイツ労働者党) は、プロパガンダを駆使した Gleichschaltung (統制) の政策を展開した。プロパガンダを司る部門であった帝国国民啓蒙宣伝省 (以下「宣伝省」と略記) は、ラジオや映画など当時新進的であったメディアを管轄下に置き、これらを用いて NSDAP の理念を国民に浸透させていくことを試みた。だが、複数のメディア領域の中で「新聞だけは集中化されにくい機関であるという理由で、プロパガンダ的介入が困難であった。」(Bohrmann 1984: 22f.⁽¹⁾) しながら、大衆操作のためには、是が非でも新聞報道の領域をコントロールする必要があった。

Hitler は自著『Mein Kampf (我が闘争)』の中で、新聞読者を3タイプに分類している。「読んだものを全部信じる人」、「読んだものを全く信じない人」そして「読んだものを批判的に吟味し、その後で判定する頭脳を持つ人」の3種類である。第1のグループは、最大の集合であり、成員は一般大衆である。彼らは国民の中では最も単純な部類に属し、自分で考える素質がなく、またそのような教育を受けていない。他人の考えをそのまま受け入れる無精者である。彼らに対する新聞の影響は驚くべきものである。第2のグループは、数的に少ない。新聞を憎んでおり、新聞を読まないか読んで憤慨するか、どちらかで、取り扱いの難しい人々である。第3のグループは極めて少ない。このような人々の価値が、彼らの知能にだけあって数にないことは残念である。(Hitler 1939: 262f、記述にあたっては平野／将積訳を参考にした)

NSDAP が新聞を大衆操作の道具として使用する際には、Hitler のこの分類を基準としたと考えられる。ナチスの報道政策は、政治方針にそぐわないような高度な思考力や知識を、第1グループに属するドイツの大衆読者が持ち合わせていないことを前提に展開された。

Bohrmann (1984) は、宣伝省の報道操作が3つの局面で実行されたと述べている：

まず、制度上の報道操作である。この操作の代表的例としては、新聞記者向けに制定された

(1) 本論においては特に断らない限り、日本語訳は筆者による。

「編集人法」(1933年10月4日公布)がある。この法の第5条では、編集人の資格条件として、ドイツ国籍を有すること、アーリア人種の血統に属する者であって、非アーリア人種の血統に属する者と結婚していないこと、満21歳以上であることなどが規定されていた。(Hofer 1957: 56f、救仁訳を参考にした)次に、経済的操作によって報道活動がコントロールされた。この操作によって、既得権益の保護が行なわれ、新聞は統制に従わされ報道機関が中央集中化した⁽²⁾。そして3つ目として、内容的報道操作も行なわれた。これは3つの操作のうちで最も実行が困難であった。なぜなら、発行される新聞紙面すべてに実際に目を通すことは不可能だったからである。宣伝省は、報道会議を開いて編集者たちに指令を下し、それらに則して新聞編集を行なうよう指示した。NS-Pressenanweisung (ナチス報道指令)と呼ばれたこれらの指令は、しかしながら遵守が徹底されず、宣伝省は後になればなるほど指令の内容を先鋭化させていった。(Bohrmann 1984: 23ff)

ここで注目すべきことは、指令の遵守が徹底されなかったという点である。従って、伝え残された指令記録とそれらに対応する発行時期の新聞紙面とを照合することによって、指令の遵守状況が明らかにされうる。このような理由から本論は、宣伝省がどのような報道指令を発し、新聞編集者がそれらを受けて紙面をどのように作り上げていったかを調査し、宣伝省の報道操作とそれらの新聞報道への浸透の状況を解明することを目的とする。

調査・分析の対象とするのは、ナチス側の資料として「戦前期の報道指令記録集⁽³⁾(以下、NS-PAVと略記)、新聞側の資料としてナチス政権期にウィーンで発行されていた国民紙Neue Freie Presse、同じくウィーンの大衆紙Das Kleine Volksblattおよびドイツの主要日刊紙Frankfurter Zeitungである。

NSDAPは、1938年3月に「Anschluss (オーストリア併合)⁽⁴⁾」を達成し、次のターゲットをズデーテン地域に向けていた(イエーガー／カイツ 2009: 322f)。さらなる領土拡大への足場の強化として、併合の約一か月後に行なわれた「国民投票 (Volksabstimmung)」が、「大ドイツ主義」の成就をドイツおよびオーストリアに住む人々にあらためて承認させる意味で、非常に重要な役割を担っていた。つまり「国民投票」というイベントは、新聞側にとっては大きな報道材料であり、宣伝省側にとっては新聞を利用した絶好のプロパガンダのチャンスであった。従って本

(2) その結果Max Amannのような人物が台頭した。Amannは、ナチ党所有のEher出版社の総支配人であり帝国報道室長でもあったほか、様々な姉妹会社を所有して報道帝国を築き上げた。ナチ党機関紙Völkischer Beobachterの社主も彼であった。(Grunberger 1971: 494)

(3) Hans Bohrmann und Gabriele Toepser-Ziegert (Hrsg.) *NS-Pressenanweisungen der Vorkriegszeit : Edition und Dokumentation*. Bd.1 und Bd.6, München 1984 und 1999. この編集本には、NSDAPの権力掌握以降第二次世界大戦までに出された報道指令を記者たちが取ったメモ書きが、全19巻にまとめられている。宣伝省の示した規則に従えば、これらのメモは使用後に処分されなければならなかった。しかし、その取り締まりを巧みにかわしたジャーナリストたちの記録が保存され、公文書館に集められた。これらに通し番号を付けて編集したものがNS-PAVである。(Bohrmann 1984: 25f, Wulf, 1964: 87f.)

論は、Anschlussから4月10日の「国民投票」までに出された報道指令を扱う。中でも「国民投票」に関する報道指令に注目し、それらが3紙の紙面にどのように反映されたかを探る。具体的には、写真やイラストのレイアウトと、記事文章や見出しに使われた言語表現から、報道指令の紙面への反映状況を観察・分析する方法を用いる。

なお本論は以下のような構成となっている。次章Ⅱでは報道指令と指令が出された報道会議の仕組みと役割、および本論で分析の対象とする新聞を紹介し、Ⅲにおいて調査資料の分析と考察、を行ないⅣにおいて本論のまとめを述べる。

Ⅱ 報道指令と新聞

Ⅱ.1 報道会議

Ⅱ.1.1 報道会議の展開

新聞に対する指令は、報道会議の場で発せられた。最初の報道会議は1914年8月3日に帝国議会の要請で行なわれ、「報道協議 (Pressebesprechung)」と呼ばれていた。この会議は「軍司令部による新聞記者への報道方法についての教示」が目標とされ、新聞において戦争報道を最も効果的に統制することができるように考えられていた。政府側からの参加者であった帝国海軍や軍総司令部の代表者が、交代で議長を務めた。一方報道の側には代表者の委員会があり、政府側と新聞側の両者が、自由に討議を行なった。また、内容は必要に応じて秘密にされた。これとは別に1919年からは接見 (Presseempfang) の場も設けられ、記者たちには記事の材料となる情報入手のチャンスが週に6回与えられた。(Bohrmann 1984: 30f.)

この報道協議が報道会議 (Pressekonferenz) と名称を変え、ナチス政権期に入ると次々と変更がなされていく。名称が帝国報道会議 (Reichspressekonferenz) となり、編集者だけで構成されていた代表者委員会は、4人のナチ党員と5人の選ばれたドイツ国民紙の代表による委員会に再編された。これを宣伝省広報室長Jahnckeが新議長として取り仕切った。ドイツ国内の新聞編集者が報道会議に参加するためには、宣伝省で出される身分証明書と警察で出される無犯罪証明書とによっ

(4) Schmitz-Berningは、Anschlußの語義を「オーストリアの、第三帝国との強制的統合 (Zwangsvereinigung)」としており、NSDAPは政権掌握後、自らの帝国主義構想を当分の間カムフラージュするために、Anschlußという表現の使用を報道指令によって禁じたと書いている。1933年6月24日の例：Das Wort Deutsch-Oesterreichischer Anschluß soll nicht mehr benutzt werden. (ドイツ・オーストリアの併合という言葉はもう使われてはならない) (Schmitz-Berning 1989) また、「オーストリア併合」を表わすには、Annexion、((他国の領土の) 併合)、Eingliederung (併合)、Wiedervereinigung (再統一) などがある。Kammer, と Bartsch の編んだ *Nationalsozialismus* では、Anschlussに以下のような語義解説がなされている：「1918年以降独立共和国であったオーストリアの、ドイツ帝国への違法な組み入れ (Eingliederung) の、婉曲的な呼称」(Kammer / Bartsch 1992) このEingliederung (組み入れ、編入) という単語は本論で扱っている報道指令の範囲では一回だけ3月21日発令の極秘通達で使われている。

て発行される写真付き許可証が必要であった。会議にはこの許可証を持って臨み、出席者リストへの記入も強いられた。また会議では指令の筆記が義務付けられた⁽⁵⁾。会議に出席できない新聞に情報を与えることは許されず、違反すれば除名、懲戒裁判へと繋がった。(Bohrmann 1984: 32f.)

II. 1.2 帝国報道会議の内容

始めに帝国報道局側から記者たちに向かって簡潔な文章で情報が述べられる。外務省は省のスポークスマンがこれを行なった。どの情報も解説がなされ、そのあと記者からの質問が許された⁽⁶⁾。会議の後、参加者は小グループに分かれ、通達の内容について討論し追加の情報を交換した。この報道会議は、その場に代表として出席していた新聞に対する批評の場でもあった。前日の指令が新聞の紙面で尊重されなかった場合、あるいは稀だが宣伝省の意向に沿って掲載された場合、その新聞は皆の前で叱責、あるいは賞賛された。(Bohrmann 1984: 33f.)

報道指令の通達は宣伝省の報道官が行なった。会議の開かれたベルリンに出向くことのできない地方紙に対しては、ドイツ通信社 (DNB = Deutsches Nachrichtenbüro)⁽⁷⁾が記事テキストを配信した。宣伝省は、場合によっては報道会議に編集者が出席する新聞にも DNB 経由のニュースを掲載させた⁽⁸⁾。

1937年6月に、追加的報道会議として「批評会議 (Glossenkonferenz)」が始まる。この会議にははっきりとした目的設定がなかった。ニュース報道よりむしろその解釈とそれと結びつけられるべき論評が行なわれた。この会議に参加が許されたのは、帝国報道会議に召集される150人の記者のうち数人であった。(Bohrmann 1984: 38)

II. 2 分析対象の新聞について

本論で分析の対象とする3紙の新聞は、以下のような経歴と性格を有している。

(5) 1936年7月以降、情報の取り扱いと保管に関して厳しいルールが取り決められた。その内容は、「毎日報道会議の代表者から [...] 届く秘密の資料は、編集会議において口頭で伝えられるか鍵のかけられた書類カバンの中に入れて必要な編集者に回覧するように [...] 使用済みで古くなった秘密報道は、相応の期限が過ぎたら破棄されなければいけない。破棄は焼却かシュレッダーで行なわれ、その記録が作成されなければならない」というものであった。(Bohrmann 1984: 42f.)

(6) 質問はほとんど出されなかったという。(Pöttker 2006: 170)

(7) 1933年12月5日、最大級の通信社であった Wolff's Telegraphisches Büro と die Telegraphen-Union の合併によってできた国営通信社で、宣伝省の第4部局、すなわち広報室の管轄下にあった。DNBの幹部は、宣伝相 Goebbels から直接指令を下された。(Benz, Graml, Weiß 1997)

(8) DNB 配信のニュースは政府が公認した官許記事のモデルとされ、地方新聞各紙に原文のまま紙面掲載された。そのようなニュースがお仕着せであることは読者に見抜かれ、まもなく、DNBは「何事も報道することを許されない (Darf Nichts Bringen)」の頭文字をとったものだ、と陰口がたたかれるようになった。(Frei/Schmitz 1989: 33f.、五十嵐訳: 49を参考にした)

はじめに、大衆紙の代表としてDas Kleine Volksblatt（以下DKV）を紹介する。1929年1月27日、Christlich-Soziale Partei（キリスト教社会党）の小型判の日刊紙としてウィーンで創刊された。1938年3月、Anschlussを機にナチスに統制された。1944年8月30日にKleine Wiener Kriegszeitungに組み込まれた。1945年8月5日には、オーストリア国民党ÖVPの日刊紙として再刊され、1947年7月まで主要な党機関紙であった。1962年10月2日にVolksblattと改称され、大型版で発行されるようになり、多くの読者を失った。そして1970年11月15日をもって廃刊した。なお、発行部数は1935年 120,000部、1958年 125,000部、1970年 5,000部であった。（Melischek/Seethaler 2003: 235f.）この新聞は1938年当時、通常第一面においてイラストや写真などの図版をレイアウトしていた。

DKVと同じくウィーンで発行されていた主要日刊紙Neue Freie Presse（以下NFP）は、1864年9月1日にウィーンで創刊された。1939年1月31日をもってこの名称での発行が停止され、Neues Wiener JournalとともにNeues Wiener Tagblattに統合され、1945年4月7日まで発行された。第二次世界大戦終結後1946年1月26日、NFPはDie Presseと改称して発行を再開し、2015年現在に至っている。（Brockhaus 2006）

1938年3月13日にナチス・ドイツのオーストリア併合を機に、新聞界においてもアーリア化が推し進められ、NFPのユダヤ人編集部員は即刻解雇され、代わりにオーストリア人とドイツ人が雇われた。1938年6月にオーストリアにも「編集人法」が適用されると、NFPにおいてもこれまで編集部にとどまっていたアーリア人証明を持たない編集者全員が解雇された。すでに統制されていたDKVを始めとする他の新聞と同様、NFPはこれ以降完全にナチスの統制下に置かれることとなった。（Hausjell 1988: 183f.）

最後に、ドイツ国内発行のFrankfurter Zeitung（以下FZ）について解説する。1856年にLudwig SonnemannによってFrankfurter Geschäftsberichteとして創刊され、1866年にFrankfurter Zeitungと改称された。その後南西ドイツの主要な民主主義的新闻となり、プロイセンの政治指導部に立ち向かっていた。1933年以降は隠れレジスタンスの牙城とみなされていたが、NSDAPは1943年まで、FZの国内エリート層や外国に対する影響力ゆえに発行を許可し続けた。1943年、ナチス政府との軋轢が増し、同年8月10日に発行禁止令が下され、8月31日をもって廃刊となった。（Brockhaus 1997, Frei/Schmitz 1989）

代表的な記者、編集長としてはRudolf Kircher⁽⁹⁾の名が挙げられる。またNS-PAVの収集者の一人Fritz Sänger⁽¹⁰⁾はFZの編集部代表として帝国報道会議に出席していた。なお、編集者であった者たちの一部が第二次世界大戦後にリーダーとなって、FZの伝統を引き継いだFrankfurter Allgemeine Zeitungを創刊した。この新聞は2015年現在、ドイツを代表する新聞として知られている。

Ⅲ. 資料の分析と考察

Ⅲ. 1 「国民投票」についての報道指令

「国民投票」は、ナチス・ドイツがオーストリアを併合した1938年3月13日から約1か月後4月10日（日）にドイツとオーストリア全域で実施された⁽¹¹⁾。「オーストリアとドイツの再統一」と「帝国議会議員の承認」とが併せて一枚の投票用紙⁽¹²⁾をもって問われたのである。新聞報道向けの国民投票関連の報道指令が、3月23日（水）の報道会議において発令されている。この報道指令（Nr. 867）が示していたのは、10項目にわたる編集上の諸注意、言うなれば「国民投票の取り扱い説明書」であった：

選挙戦について：帝国宣伝指導部が編集者に向けていくつか指令を出した。編集部には要点のみ伝える。詳細については様々な宣伝部局を通して文書が来る

- 1) 宣伝省は新聞に対して毎日その時々選挙スローガン、説明用の資料などを出す。
- 2) 宣伝省の特別役務として、新聞各紙には、それも各大管区につき2紙に特別報道資料が提供される。記事は個々の行政区域で重複しないように。そうすることによって、画一性が避けられなければいけない。
- 3) ナチ政府の成果について数字を再掲する際には、ここ数日に出される官庁の資料のみが利用されなければならない。

(9) 1938年、R.KircherはFZの編集長であった。彼はドイツで最も権威ある政治ジャーナリストでありながら、ナチ党御用達の新聞になり下がった（世間的にはそう評価された）FZの編集長の地位にあった。だが、表向きにはHeil Hitlerと書きながら、その実、彼の天才的な能力と激しい当てこすりによって体制に対して遠回しな非難ができた人物でもあった。ナチ体制に入り込んだまま活動が続けた彼を批判する者もいたが、同業者たちの中には「汚れ役」を買って出たKircherを高く評価する者は多かった。（Frei/Schmitz 1989）

(10) Sangerが報道指令を記録・保管することができた理由の一つとして、学生時代に修得した速記能力があった。FZ編集部が宣伝省の規則を守らず集めて保存していた指令メモを、1935年の編集部移転の際に、そこで働いていたSangerが手に入れた。後に自分が報道会議に出席するようになると、スポークスマンの論述を速記で書き取り、それまでの収集と合わせて友人に託した。戦後これらの資料がアメリカの占領軍当局によって回収され、ニュルンベルクへと運ばれた。Sangerは散逸の危機にあったそれらの資料を再び取り集め、最終的にコブレンツの公文書館に委ねた。（Bohrmann 1984: 56f.）

(11) オーストリア併合と国民投票は以下のような経過の中で生じた。オーストリア首相Schuschniggは、3月9日にインスブルックに赴き、オーストリアが独立した国であることへの賛成を求める「国民投票」をオーストリア全域で3月13日に行なうと宣言する。しかしこの動向を素早く察知したナチスは迅速にこれに対処し、12日にウィーンへと進駐し、当初Schuschniggが投票を予定していた13日に、ドイツによるオーストリアとの再統一を公表した。そして即日報道会議において、4月10日に「大ドイツ」の承認を問う「国民投票」を行なうと発表した。（阿部 2001: 354f.; ツェルナー 2000: 634f.）

(12) 投票用紙は、多くの新聞に事前掲載された。【図版4】参照。

- 4) 選挙活動における新聞利用は、政治面だけでなく文芸欄、経済欄などもある。何人かの詩人がオーストリアの文化について文芸欄に書くためにオーストリアへ派遣されている。
- 5) 新聞には毎日画質の高い図版を2枚送る。これらの図版は、きちんと掲載されなければならない。配達地域において重複しないように。
- 6) ナチ党通信の選挙特別役務は、尊重されなければならない。
- 7) 帝国に重要なものとして全紙によって掲載されうる演説は、毎日1本だけである。大管区長、帝国演説者などの演説は該当する大管区州都か地域で特別指令があった時に伝えられなければならない。総統のスピーチについては、簡潔に要約されたテキストしか出されない。それは、オーストリアの選挙特別役務によって、あるいは帝国の該当する都市から出される。ケーニヒスベルクとウィーンにおける総統の演説だけが、全紙によって掲載されなければならない。さらに外国の出来事に基づいた総統のほかの演説が、帝国にとって重要なものとして掲載されることも可能である。それについては詳細な指示が出される。
- 8) 様々な新聞に選挙特別役務の特別ルポが提供される。その都度ふさわしいレイアウトで掲載されなければならない。
- 9) 選挙戦終了時の特別号は、管轄の帝国宣伝部局に提出されなければならない。特別号は、とりわけ綿密で印字もとりわけ美しく印刷されなければならない。効果が期待できるからである。
- 10) 投票日当日の特別版あるいは選挙前の最後の号に、半ページ分の図版が第一面に載せられる。この絵は、その地図に総統の図版が組み込まれたところの大ドイツの地図を表わしたものである。

上記10項目のうち、特に5)「指定の図版使用」、7)「選挙演説の掲載」、10)「直前号第一面のレイアウト指示」の3項目は、報道指令と紙面作成の関係が分かりやすく、分析の際に明確な基準が設定できる指示内容である。また「国民投票」に関連した指令は3月23日以外の日にも出されている。「国民投票実施の知らせ」がAnschluss（3月13日）と同時に出されて以降、投票前日までに通達された報道指令は、あくまでも残存している記録の範囲内で、「国民投票の取り扱い方・10か条」も含めて、25日間（土曜と日曜合わせて報道会議が一回だった日を含む）に362回、そのうち「国民投票」関連の内容は37回で、全体の約10%にあたる⁽¹³⁾。ただし、3月23日より後に明らかに「国民投票」に関連して出されたと読める指令は、10項目のいずれかの繰り返しかあるいは最初に出された指令に対する補足や追加であった。3月13日以降を時系列に沿って見ていくと、たとえば以下のような指令文書を目にする：

(13) 残存する資料としての報道指令の数は、1933年は（この年は、7月に宣伝省が報道会議を引き継いだため半年間でカウントして）330回、34年は約1,000回、35年約1,500回、36年2,500回、37年約3,100回、そして1938年が3,750回と増加している。（Bohrmann 1984: 13）本論で扱っている約一か月間の指令回数は、1938年一年間のひと月平均にほぼ等しい。

Nr.1084 選挙前最終号の第一面のために、画像サービスによってスケッチが配布される。しかしながら、第一面は各紙の独自のレイアウトがなされてもよい。第一面は、ポスターのような効果を与えなければいけない。どのような記事も次のページまではみ出してはいけない。何よりもまず、一層大きくなったドイツ国境を示した地図がインパクトのあるスローガンを付けて掲載されなければならない。(4月8日)

あるいは同じ日に以下のような指令も出されている。国民投票前日にあたる9日には、投票関連の報道指令として「総統の演説の掲載の仕方」について述べられものが一つあったが、「国民投票」の掲載方法に関する指示は以下の指令が最終と考えられる。投票当日発行向けの指示であるから、当然4月10日号の紙面に反映させるべきことである：

Nr.1087 DNBの電話伝達新聞は大ドイツ帝国の日に寄せて、効果的な社説を載せなくてはいけない。(4月8日)

このほかにも投票をテーマとした指令は様々な形で出されていた。たとえば「ある著名写真通信社がある写真を送ってきた。その写真というのは、1937年夏にオーストリアの婦人女子たちに囲まれた総統を撮ったものである。この写真は、第一面か第二面に掲載されなくてはならない。(Nr.1010、4月2日)」のようにホットな情報資料とは言い難い図版材料を推奨した指令や、「オーストリアの運命が4月10日に決定されるというのは間違った見解である。すでに再統合(Wiedervereinigung)によって決定的な状況になっているからである(Nr.800、3月17日)」といった指摘めいた文言、あるいは「選挙資料は、自社の記事を提供できる新聞は独自の仕事をしなくてはならない、というコメントを付けて配布された(Nr.913、3月25日)」のように、編集活動において各紙のオリジナリティを期待する表現が使われた指令もあった。

補足として一つの特徴点を挙げておく。これは報道操作においてDNBが果たしていた役割と言ってもよいのだが、「大型・中型紙は、Goebbelsの演説をフルテキストで掲載せよ(Nr.958、DNBの電話伝達、3月30日)」のようにDNBからの直接的な通達(表示はDNB-Rundrufとなっている)は、本論の分析対象範囲25日間において70回出されており、この期間内での指令回数362回の約19.2%に相当する。DNBという語が使われた指令⁽¹⁴⁾を含めれば、DNB関連の指令回数は計102回となり全体の28%に増加する。これらの数字から、DNBの報道操作における役割範囲の広さが分かる。

(14) 例: Hullが行なった演説は、DNBが配信するテキストでのみ掲載されなければいけない。(Nr.798、3月17日)

Ⅲ. 2 報道指令の新聞紙面への反映

Ⅲ. 2.1 「国民投票」に関する報道指令に基づいた紙面

新聞に向けた10項目の国民投票の取り扱い方は、3月23日以降にもいくつかの追加や反復を重ね、4月10日まで報道指令として出され続けた。本論では、一見してその反映が確認できる3項目を中心に、調査対象3紙において掲載状況を比較分析していきたい。分析するポイントは、Nr.867の指令5)「宣伝省から送られた図版が使われているか」7)「選挙演説が指示に従って掲載されているか」10)「選挙直前号第一面に各紙がどのようなイラストを載せたか」の3点に、Nr.1087の指令「4月10日号第一面に大ドイツを論じた社説が載せられているか」を加えた4点である。

1点目として5)について見ると、【表1】にあるようにDKVとNFPに違いがみられる。なお、FZは「国民投票」関連の図版を一切掲載しなかったため、表にはない：

【表1】図版の掲載状況

	Das Kleine Volksblatt	Neue Freie Presse
3月24日	ウィーン・環状通りのSAの行進 (写真)	
26日	Hermann Göringの横顔	Hermann Göringの横顔
3月27日	Göringの車パレードの熱狂ぶり (写真)	
29日	Goebbelsの横顔	Goebbelsの横顔
30日	Goebbelsの演説の様子 (写真)	
31日	KdFの船の進水式の組み写真	
4月1日	ザルツブルクにおける接見	
2日		幕僚長 (Stabschef) Lutzeの横顔
3日	女性に囲まれるHitler (写真)	女性に囲まれるHitler (写真)
4日	経済相Josef Neumayerの横顔	Hitlerグラーツへ (写真)
5日		Baldor von Schirach (青少年指導部)の横顔
6日	ケルトナー国境地帯 (4枚組写真)	
7日	党幹部Rudolf Heßの横顔	党幹部Rudolf Heßの横顔
8日	アウトバーン鍬入れ (写真)	
9日	大々的なHitlerの肖像	Hitlerの肖像
10日	「大ドイツ」の地図を背景としたNSDAPの党エンブレム 【図版1】	Ja (賛成)の文字に乗っている「大ドイツ」の地図 【図版2】

の部分、同一もしくは同じ図版の拡大 (縮小) 版を使ったことを示す。

3月25日と28日は、投票関連の図版が紙面上になかった。

確かに共通する図版が載せられており、それらが宣伝省から送られてきたものであると想定することができよう。DKVは写真を使うことが非常に多い。一方でNFPは他の図版をほとんど使用せず、DKVと比べると文字の占める割合が大きい。これに対しFZは、通常から写真やイラストをあまり使用せず、5)は全く守られていなかった。外国の動向を伝えるシリーズ記事に地図が数回添えられていたのと、4月8日号にアウトバーン計画図が載せられていた以外に図版は見られない。

2点目の選挙演説に関しては、必ずしも第一面トップ記事として掲載されてはいなかったものの、3紙とも紙面に載せていた。

3点目のイラスト作成と掲載の指令に従って、DKVは第一面全面を使ってイラストを載せている【図版1】。ただしHitlerの肖像を組み込むことはせず、肖像は前日号第一面で使用していた。NFPは、紙面1/6ほどのサイズで控えめだが、シンプルで分かりやすい「Ja（賛成）」に支えられる大ドイツの地図」を描いた【図版2】。なお、FZには5)の場合と同様イラストは描かれていない。



【図版1】 Das Kleine Volksblatt
1938年4月10日号第一面



【図版2】 Neue Freie Presse
1938年4月10日号第一面

そして4点目である「大ドイツ」を論じた社説は、3紙全て4月10日号第一面に書かれている。論説全体の長さは、DKVが440語、NFPが1,172語、FZが773語で、DKV:NFP:FZが約1:3:2の比率となっている。社説から窺われる各紙の特徴点は以下である。

DKVの社説は、タイトルをGroßdeutschland（大ドイツ）とし、主語はwir（我々）である。テキスト内では「ドイツ」「ドイツの」などのdeutschを含む単語が17回使われている一方で、「オーストリア」「オーストリアの」を含む単語は一度も出てこない。この新聞は、オーストリアで発行されていた新聞であるのに、テキストの中心に置かれているのがドイツで、「国民投票」をオーストリア中心ではなくドイツ帝国という一つの大きな枠組みの中での出来事としてしか提示していないことが分かる。言葉の表現としては、「詩人の国の、思想家の国の、国民にとって」といった言い回しや、「外交官たちの議論においてではなく、戦の轟音においてでもなく、詩の美しい韻律においてでもなく、学者の思慮深さにおいてでもないところで、ドイツの問いに答える」のような畳みかける表現が使われている。冒頭の「この4月10日に」というフレーズの4回の繰り返しも含めて、まさにナチズム言語の特徴の一つである「繰り返しによる大衆への叩き込み」（宮田 1991: 140f.）がここで行なわれたと言ってよい。また固有名詞Hitlerは使われず、後半に集中して9回現れるFührer（総統）によってその偉大さが多様に表現されている。たとえばそれは「大ドイツに対する告白は、大ドイツの造り主、すなわちFührer（総統）に対する告白と区別することはできない」という大仰な言い回しに見受けられる。これもまたナチズム言語の特徴と言ってよい。（宮田 1991: 140f.）最後に、NSDAPのスローガンEin Volk, ein Reich, ein Führer（一つの国民、一つの帝国、一人の総統）を振ってEin Volk für ein Reich und für einen Führer！と締めくくり、明らかなナチス支持の姿勢を示している。この社説は全体を通して平易な言葉で語りかけており、非常に理解されやすい。

NFPの場合は、「Die heilige Wahl（神聖な選挙）」と題して、国民投票の意義がFührer（総統）への感謝であることを説いている。Hitler, Adolf Hitlerと書いたのは2回で、そのほかは全てFührer（総統）を用い、彼の「偉業」を紹介している。例として、「ドイツ国民が500年以上も前から失ってきた団結心を、総統はたった4週間でまとめ上げた」といった大袈裟だが分かりやすい数的表現や、「フリードリヒ大王のポツダム、ゲーテのヴァイマル、マリア・テレジアのウィーン」に続けてHitlerを登場させている大胆な表現などが挙げられる。最後のメッセージ「自分たちに最低限できることは、Jaでもって感謝の意を示すこと」はやや抑えた表現ではあるものの、Jaが持ち上げる大ドイツのイラストとマッチしていることは否めない。指令通り独自性を発揮した紙面に仕上がっていると言えよう。

FZの社説は、主筆Kircherが書いた。「Das „Ja“（賛成票）」である。ここでは分析対象としたウィーンの2紙とは明らかに異なった特徴点が見られる。それは、FZがドイツ国内の新聞でありながら、ナチス政府と距離を取っていたと考えられる点である。このことはまず、Führer（総統）という単語を一回しか用いず、ほかでは4回ともHitler, Adolf Hitlerと書いていることから読み取れる。そして、「彼は書き、語り、とりわけ行動した。彼の行動は、彼がドイツ史の最も内奥的で必要不可欠と認識した方針に適うものであり、従うものである」といった言い回しは、

他の2紙のように総統をほめたたえ、投票を勧めるストレートな言語表現とは違って、ナチスと距離を取った言い方であると受け取れる。「オーストリア」の語もしばしば使用されている。さらに、ナチス固有の名称である「ヒトラー・ユーゲント」と「ドイツ女子同盟」をそのままの名称で登場させず、「若者たちは行進する。まずは白いシャツと腕章を付けて。そして荘重な行進について行く女子たち、数年来練習してきたかのように」と間接的に書いた部分からは、遠回しな表現を用いてナチス用語をあえて使わなかったFZの意地のようなものが見えてくる。これらの点から、当時FZはNSDAPの傘下でありながら、一定の距離を保ち、FZ本来のスタンスを捨てていなかったと見ることができる。

III. 2.2 各紙のその他の特異点

ここまで社説に関する指示を含めた「国民投票の取り扱い方」4点について分析してきた。本節では、上記のような報道指令に従った掲載状況ではなく、各紙が各紙なりに行なった紙面作りについて観察することとする。

DKVは、投票日まで多様に選挙・投票のアピールを続けた。4月5日号の「投票許可証発行のお知らせ」、4月6日号の「切り取って保存できる投票用紙の書き方」、4月6日と7日号の「写真で示す投票用紙の書き方」【図版4】⁽¹⁵⁾などがそうである。このほかに特に目を引いたのは、主に紙面の下部に帯状のスペースを取って書かれた、太くて大きい文字による投票アピールの



【図版3】 Das Kleine Volksblatt 1938年4月7日号
第一面タイトル部分：Kleineに上書きされるようにJa（賛成）と描かれているのが分かる。（4月8日号も同様）



【図版4】 投票用紙の記入の仕方：明らかにJa（賛成）の○がNein（不賛成）の○より大きい。

(15) DKV以外の新聞において、オーストリア国立図書館アーカイブ（ANNO: <http://anno.onb.ac.at/anno.htm>）がWeb公開している範囲においてピックアップしただけでも4月9日および10日にオーストリアで発行された新聞延べ50紙のうち18紙が、書き方図解付きの投票用紙を掲載していた。ほとんどの新聞において実際の投票用紙に書かれた文と同じであった：Bist Du mit der am 13. März 1938 vollzogenen Wiedervereinigung Österreichs mit dem Deutschen Reich einverstanden und stimmst Du für die Liste unseres Führers Adolf Hitler?（君は、1938年3月13日に制定されたオーストリアとドイツ帝国との再統一に同意し、我々の指導者 Adolf Hitler のリストへ賛成の票を投じるか？）

短文である。このスペースを利用して選挙演説の予告を載せた3月26日号、4月2日号および4月7日号と、選挙者名簿の確認を載せた3月30日号と31日号を除き、他の号には以下のようなフレーズが書かれていた：

我がJa、大いなる未来のシグナルだ
誰もが明日もう一人誰かを連れて選挙へ
明日は投票するぞ！
早めに投票に行け！
投票は17時に終了する！

投票日であった4月10日号には、上述の4番目と5番目の短文が紙面にはめ込まれており、特に5番目は第23面の連載小説を上下に二分する位置に大きく書かれていた。また、毎号一コマ漫画を載せていたこの新聞は、4月10日号においては、サッカー選手がJaと書かれたボールをいくつも蹴っている絵が描かれ、「アスリート全員の今日の合言葉」というタイトルが付けられていた⁽¹⁶⁾。以上のように様々な掲載状況を見ると、DKVが3月23日から投票直前まで報道指令を守って、いやそれどころか指令以上に投票中心の紙面作りをしていたことが分かる。

NFPは、3紙の中ではいわば中間的存在であったと言える。DKVほど徹底したナチス寄り新聞でもなければ、この後で述べるFZほどナチスと距離を取ってもいない。そのような位置に立ちながら、NFPはNFPなりに「国民投票」に向けて紙面で様々なアピールを行っていた。投票用紙のフォーマットを載せ（4月5日号）、投票方法を説明し（4月6日号、4月9日号）、空欄に書き込みができるよう工夫された投票結果記入表を提供した（4月10日号）。さらに投票日の4月10日号では、Theodor Heuß⁽¹⁷⁾の書いた「図解ドイツの歴史」を特集として載せた。特にNFPの紙面形成上の独自性は、小まめな投票アピール用の短文掲載であった。これはDKVも用いた方法であるため完全にNFP独自とは言い切れないが、派手なレイアウトをしないNFPにあっては、かなり思い切った投票アピール方法だったと言えよう。この新聞の場合、DKVほど短文の文字は大きくも太くもないが、ラテンアルファベット文字を使用して紙面の所々にあたかもサブリミナル効果的に、しかも周辺の記事内容とは無関係な位置に書かれていた⁽¹⁸⁾。3月23日から4月10日という短い期間においてではあるが、NFPの紙面からは極端にナチス寄りであ

(16) DKVはこのような方法によって投票アピールを行っていただけでなく、4月7日号と8日号では、第一面の新聞タイトルDas Kleine VolksblattのKleine（小さい）に×印を付けてJaと書き直していた。これは、この新聞が「小ドイツ」ではなく「大ドイツ」を支持していることの主張と読み取ることができるかも知れない。【図版3】

(17) NSDAPの政権掌握時に全権委任法に賛成票を投じ、その後内閣から追放された政治家。1941年にはFZに入社している。後に西ドイツ初代大統領になった。

るとか反対にナチスに批判的であるといったような明確な方向性が見えてこなかった。しかし、NFPを没個性的な新聞と言い切るには根拠が足りない。

FZは、紙面作成として表われる報道指令遵守の点においてオーストリアの2紙とは全く異なっていた。Nr.867の3項目に限定して見ると、それに従って書いたと考えられる指示はかろうじて選挙演説の掲載についてのみであった。FZはとりわけ外国の情勢について詳細に報じていた新聞である。この新聞は、ドイツにとっての対外的な問題、とりわけイギリスやフランスの動向を日常的に書いていた。宣伝省の求めた「国民投票の取り扱い方」を無視していたとは言わないまでも、重視していたとは考えにくい。多くの新聞が廃刊に追い込まれていく中で、FZはⅡ.3で述べたようにエリート層に多くの読者を持ち、外国に対しても影響力が大きかったことで生き延びてきた主力紙である。つまり、FZは通常の編集スタイルを変えることなく、ナチスとは距離を置いて書き続けていたと解釈できる。このことは、集計された数字によって裏付けられる。3月23日から「国民投票」の日までにFZが発行された18日号分のうち、第一面トップ記事としての演説の報道7回は、外交や国外情勢の話題を報じた8回には及ばない。FZは、前節Ⅲ.2.1で社説を分析した結果と同様、ドイツ国内にありながら、ナチスに接近し過ぎない所で自らのペースを維持しつつ報道活動を行っていたと考えられる。

Ⅳ. おわりに

「国民投票」関連の報道指令、とりわけ3月23日発令の10項目のうち紙面への反映が直接的な5)、7)、10)の3項目の指令に従って、DKVは、忠実に、さらに言えば指令以上に投票にこだわって、ナチス政権を前面に押し出した紙面作成を行なった。このことは、図版の多用や、様々な投票アピールの工夫に見ることができる。NFPは、報道指令に沿って、極控えめなナチス政権支持のスタンスを示した。それは、4月10日号第一面の社説の文面と、それを引き立てるシンプルで配置の良いイラストとの調和が証明している。一方で、FZは自分の流儀を崩さず、普段通り外国の政治ニュース中心の紙面作りに徹した。第一面に数多く、そして詳細に書かれた外国情勢の報道と論説がそれを物語っている。

「国民投票」に関連した報道指令に限定した、しかも3紙の比較においてすら、でき上がった紙面は多様であった。とても統制された姿とは言い難い。では、宣伝省の目指した、「手段としての新聞メディア」の統制は失敗だったのか。宣伝省にしてみれば、新聞の統制が最終的に世論統制につながらなければならなかったはずである。

実際、宣伝省は、様々な禁止や命令形式の指令でもって新聞編集に同一の方向性を強いておき

(18) 以下のような投票への呼びかけが掲載されていた：「君の祖先たちの夢、君の子供たちの未来、大ドイツ！」、「君の国民が君に呼びかける。君の答えはJaだ！」、「投票には早目に行け」、「玄関の所に君の投票所の住所が書かれている」、「もう一度急いで投票の手引きを読め」、「投票終了は17時」

ながら、同時に、3月23日の「画一性が避けられなければいけない」や、4月8日の「第一面に各紙の独自のレイアウトがなされてもよい」などの指令によって、新聞の均一化を避けようとする意思も明確に表わしていた⁽¹⁹⁾。この点について、新聞側は、考慮の上で紙面を作成した。このことは、「国民投票」についての社説とイラストが3紙3様であったことから理解されうる。DKVは、指令以上のことをナチスに追従的に書いていた。画一化を避けたいという宣伝省の要求に対し、ナチスに迎合する形で答えた。NFPも、DKVよりも控え目だが指示された最低のラインを守り、ナチス支持の姿勢を示した。そしてFZは、ナチスに迎合的ではないにも拘らず宣伝省に発行を許された特権的立場に立ってインテリ読者層向けに紙面を提供した。以上から分かるように、少なくとも本論で対象とした3紙は、それぞれ異なった応じ方で宣伝省の要求に答えていた。すなわち、結果から見れば、書き方は様々だが、どの新聞も宣伝省の報道指令を守っていたことになる。遵守と非画一性を併せ持った報道操作は、それなりに成功していたのである。

一方で、宣伝省の側に立つと、一度には満たされ得ない相反する指示を、編集者に対して出していたことになる。これでは、指令を発する宣伝省こそ、画一化（統制）を目指すのに同時に非画一化を要求するというジレンマに陥っていたと見做されてもおかしくない。だが、実は、指令メモ破棄厳守の不徹底や新聞発行後の違反叱責といったような宣伝省の態度は承知の上で為されたことであって、報道側に対する締め付けを緩めておくことでかえって大衆操作という最終目標を成就させる意図であったとも考えられる。この疑問を解決するには、最低でも調査範囲をオーストリアがナチス政権下に置かれていた1945年まで拡張する必要がある。さらに、編集部の被統制状況も調査せねばなるまい。この点については、次回の研究課題としたい。

参考文献

《一次文献》

Bohrmann, Hans / Toepser-Ziegert, Gabriele (1984,1999): *NS-Pressenanweisungen der Vorkriegszeit: Edition und Dokumentation.*

Bd.1 und Bd.6. München (K.G.Saur)

Frankfurter Zeitung

Das Kleine Volksblatt

Neue Freie Presse

《参考文献》

辞典、語彙集：

Brockhaus Enzyklopädie in 30 Bänden. (1997,2006) Leipzig (F. A. Brockhaus)

(19) Goebbelsは、1933年10月4日の「編集人法」公布に際しての演説において、望ましい新聞のあり方を次のように定義づけている：「報道は意において形を一にすべきだが、意の表現においては形が多様であるべきだ。」(Frei/Schmidt 1989: 33)

- Meyers Enzyklopädisches Lexikon*. (1979) Mannheim (Bibliographisches Institut)
- Benz, Wolfgang / Graml, Hermann / Weiß, Hermann (1997): *Enzyklopädie des Nationalsozialismus*. München (Deutscher Taschenbuch Verlag)
- Kammer, Hilde / Bartsch, Elisabeth (1992): *Lexikon Nationalsozialismus*. Reinbek (Rowohlt)
- Klee, Ernst (2009): *Kulturlexikon zum Dritten Reich*. Frankfurt / M. (Fischer)
- Schmitz-Berning, Cornelia (2007): *Vokabular des Nationalsozialismus*. Berlin (Walter de Gruyter) Sternberger, Dolf / Gerhard, Storz / Süskind, W. E. (1986): *Aus dem Wörterbuch des Unmenschen*. Berlin (Ullstein)
- Wistrich, Robert (1983): *Wer war wer im Dritten Reich*. München (Harnack)
- その他：
- Frei, Norbert / Schmitz, Johannes (1989): *Journalismus im Dritten Reich*. München (C.H.Beck) [邦訳：ノルベルト・フライ / ヨハネス・シュミッツ (1996) 『ヒトラー独裁下のジャーナリストたち』 (五十嵐智友 訳) 朝日新聞社]
- Grunberger, Richard (1971): *A Social History of the Third Reich*. London (Weidenfeld & Nicolson) [邦訳：リヒアルト・グルンベルガー (2000) 『第三帝国の社会史』 (池内光久 訳) 彩流社]
- Hausjell, Fritz (1988): *Die veruntreute Wahrheit*. Salzburg (Müller)
- Hitler, Adolf (1939): *Mein Kampf, Erster Band*. München (Eher Verlag) [邦訳：アドルフ・ヒトラー (2005) 『わが闘争 (上)』 (平野一郎 / 将積茂 訳) 角川書店]
- Hofer, Walther (1957): *Nationalsozialismus: Dokumente 1933-1945*. Frankfurt/M. (Fischer) [邦訳：ワルター・ホーフアー (1982) 『ナチス・ドキュメント1933-1945』 (救仁郷繁 訳) ペリかん社]
- Melischek, Gabriele / Seethaler, Josef (2003): *Die Wiener Tageszeitungen, Eine Dokumentation Bd.4 1938-1945*. Frankfurt / M. (Peter Lang)
- Pöttker, Horst (2006) *Journalismus als Politik. (Publizistik Heft 2.)*. Dortmund (VS Verlag)
- Wulf, Joseph (1964): *Presse und Funk im Dritten Reich, Eine Dokumentation*. Gütersloh (Sigbert Mohn)
- 阿部良男 (2001): 『ヒトラー全記録 20645日の軌跡』 柏書房
- ヴォルフガング・イエーガー / クリステイーネ・カイツ (2006) 『【現代史】ドイツの歴史 (世界の教科書シリーズ ⑭)』 (中尾光延 他訳) 明石書店
- 草森紳一 (1978) 『ナチス・プロパガンダ 絶対の宣伝③煽動の方法』 番町書房
- 宮田光雄 (1991) 『ナチ・ドイツの精神構造』 岩波書店
- エーリヒ・シュトラスナー (2002) 『ドイツ新聞学事始 新聞ジャーナリズムの歴史と課題』 (大友展也 訳) 三元社
- ジェームズ・テラー / ウォーレン・ショー (1993) 『ナチス第三帝国事典』 (吉田八岑 訳) 三公社
- エーリヒ・ツェルナー (2000) 『オーストリア史』 (リンツビヒラ 裕美 訳) 彩流社